

コミュニケーション能力を高めるための工夫  
ー情報交換のためのタスクをとおしてー

千葉県立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇〇

## 1 研究の背景と目的

英語学習者ならば誰でも「英語がしゃべれるようになりたい」という願いを持っているのではないだろうか。それは、本校の生徒も同様だ。しかし、生徒同士のコミュニケーション活動を観察すると、言いたいことはあるがうまく言葉にできない、聞きたいことはあるが何をどのように聞いたらいいのか分からない、会話が弾まない、その結果、英語で表現することを諦めてしまうという現状が見られる。このような問題を解決するべく何かよい方策はないかと考えた。たとえば会話においては、相手と言葉を交わしながら話が展開し、相手の言葉を聞きながら互いが意思の伝達や情報の授受をする。これは言わば即興性が求められる共同作業であり、その能力を身につけることは、そう容易なことではないように思われる。しかし、そこに何らかの「方略 (ストラテジー)」を見つけ出し、それを生徒が習得することができれば、より積極的なコミュニケーション活動が可能になるのではないだろうか。

そこで本研究では、特に日常的な会話において、生徒が何をどのように発言したら会話を継続させることができるか、互いの意思の疎通、情報交換が可能になり得るかということ进行研究し、現状の生徒にとって有効なストラテジーを見出してみたい。そして生徒のコミュニケーション能力を向上させたい。

## 2 研究仮説

Canale (1983) は、コミュニケーション能力は、文法能力 (grammatical competence)、談話能力 (discourse competence)、社会言語的能力 (sociolinguistic competence)、方略的能力 (strategic competence) の4つに下位分類した。方略的能力とは、コミュニケーションをより円滑に進める際に必要とされる能力であり、会話が途中で途切れてしまうような場合にそれを回避するための能力であると論じている。

また斎藤 (2008) は、日本人学習者の質問作成能力の貧弱さを指摘し、それを自己表現力を育てる第一歩と位置づけている。これらの文献等を参考にして、本研究では、会話において「質問すること」をコミュニケーション・ストラテジーの1つとして設定し、以下のような仮説を立てることとする。

コミュニケーション・ストラテジーに着目し、質問することや発話を促すためのタスクを開発・工夫すれば、会話を継続させ情報交換する能力を向上させることができるであろう。

## 3 研究内容・方法

### 3.1 文献研究

[タスク中心授業法 (Task-based Language Teaching)]

タスク中心授業法とは、第二言語習得研究からでてきたもので、学習者に達成させるべき課題 (タスク) を与え、その課題達成のための道具として目標言語を使わせ、その言語使用の過

程を最大限に利用して実践的運用力を育成しようとするアプローチである。タスク中心授業法の最大の特徴は、その目標が与えられたタスクを完成させることであり、発話の正確さよりも発話される意味に重点が置かれるという点である。

Krashen (1982) はインプット仮説 (input hypothesis) を発表した。これは、第二言語習得には、十分なインプット、つまり、学習者が聞いたり読んだりして習得しようとする言語を多量に取り込むことが必要だとする論である。しかし、この説に反する批判として、インプットを理解するだけで表現能力も含んだすべての言語能力が自動的に習得できたことを示す実証例がない。そこで登場したのが、Long (1983) の相互交流仮説 (interaction hypothesis) や Swain (1995) のアウトプット仮説 (output hypothesis) である。前者は、言語習得にはコミュニケーションを図っている相手と意味を確認し合ったり、意見を言い合ったりするなどの相互作用 (=意味交渉 : negotiation of meaning) が必要であり、またそれがインプットの理解を助けることになるという仮説である。そして後者は、アウトプット、つまり学習者が習得しようとする言語を話したり書いたりして試しに使用することが言語習得において必須の条件であると主張している。これらの理論を整理すると、第二言語習得には、インプット、話者間のインタラクション、アウトプットが重要であるということになる。そして、これらの要素を満たしているのがタスク中心授業法だと考えられる。

本研究では、インプット、インタラクション、アウトプットの理論を効果的に取り入れたタスクを生徒に与え、目標とするコミュニケーション方略の習得を促し、コミュニケーション能力を向上させたい。

### 3.2 質問する力を習得するためのタスク

- (1) 定型の質問文を使ってインタビューすることにより情報収集をするタスク (実践1)
- (2) 情報を得るために、グループで質問文をつくり、ALT から回答を得るタスク (実践2)
- (3) 1つのトピックについて詳しい情報を得るために、相手の回答に基づき、さらに質問を続けるタスク (実践3)
- (4) 質問することを意識して会話を続けるタスク (実践4)

### 3.3 検証方法

インタビューテストを行い、生徒が ALT から情報を得る様子をモニターし検証する。テストは5月、9月、10月の3回行い、それぞれの生徒について変遷を辿る。

## 4 研究計画

### 4.1 対象生徒

平成 21 年度	3年生家政科1クラス (選択者の授業) 3年生商業科2クラス (1クラス2分割での少人数授業)
平成 22 年度	3年生商業科2クラス (1クラス2分割での少人数授業)

### 4.2 指導科目

(科目) オーラル・コミュニケーション I (2単位)  
(教科書) SELECT Oral Communication I (三省堂)

### 4.3 指導計画

期 間	研 究 内 容
平成 21 年 6 月～8 月	先行研究・文献研究調査

平成 21 年 9 月 ～平成 22 年 1 月	試行実施 (1) 相手の発言の要点をとらえる練習 (2) 相手の発言の要点を繰り返す練習 (3) 相手の発言の要点を繰り返してからコメントや質問を加える練習
平成 22 年 1 月～ 3 月	次年度への見直し・文献研究調査
平成 22 年 4 月～ 5 月  平成 22 年 6 月～ 9 月  平成 22 年 10 月	授業実践および検証 (実践 1) 定型の質問文を使ってインタビューすることにより情報収集をするタスク ・インタビューテスト① (実践 2) 情報を得るために、グループで質問文をつくり、ALT から回答を得るタスク (実践 3) 1 つのトピックについて詳しい情報を得るために、相手の回答に基づき、さらに質問を続けるタスク ・インタビューテスト② (実践 4) 質問することを意識して会話を続けるタスク ・インタビューテスト③ ・検証および研究のまとめ

## 5 試行実施（平成 21 年 9 月～平成 22 年 1 月）

「会話の継続」という目標を立て、そのためには、相手の発話に対するレスポンスが重要であろうと考えた。レスポンスまでの過程を以下のように考え、そのための段階的な指導を行った。

**相手の発話の要点を捕らえる→それに対する自分の見解を持つ→レスポンス（感想・意見・質問）**

### 5.1 授業内容

#### (1) 相手の発言の要点をとらえる練習

[主な活動内容] リスニングにより話の要点やキーワードを聞き取る練習

あるストーリーを、フォーカスワード（Who, Did what, Where, When, How, Why）が提示された Memo Sheet にメモを取りながら聞く。これによって、どのような事柄が要点と成り得るのかを確認し、それらをとらえるような聞き方ができるよう練習する。

#### (2) 相手の発言の要点を繰り返す練習

相手の発言を聞き、その要点を繰り返すというステップを踏むことにより、生徒は相手が何を伝えようとしているのかを逃がさないよう集中して耳を傾ける。そして聞き取った内容を自分の中で整理し、要点として重要と思われる言葉（キーワード）を選択し、それを繰り返して言う。ここで繰り返した言葉は、次に自分が言うべき感想や意見、質問を生み出すためのヒントとなるのである。

[主な活動内容]

教科書のモデル文や、教師の発言の要点を捉えて繰り返す練習を何度も行う。

#### (3) 相手の発言の要点を繰り返してからコメントや質問を加える練習

[主な活動内容]

①感想をコメントする表現や質問する表現の練習

②ALT の発言（1 文）に対して、要点を繰り返してから、コメントや質問をする練習  
（練習例）

・ I won a lottery. → You won a lottery? Wow! That's great!

- ・ I have a test tomorrow. → Test? Sounds tough. Good luck!
- ・ My train was 30 minutes late. → 30 minutes late? Why?

③相手の発言を聞き、要点を繰り返してから質問することで対話をする練習

(練習例：教科書 Lesson 6 のトピック「テレビ番組」から)

- A: I like documentaries.  
 B: Documentaries? What's your favorite?  
 A: History.

## 5.2 反省と見直し

相手の発言に対するレスポンスを工夫することで、会話の継続が促されるのではないかという考えのもと、コミュニケーション活動を行った。その結果、簡単な会話において相手の発言に、それまでは何を言い返したらいいのか分からずにいた生徒が、ひと言ふた言のレスポンスができるようになった点は認められたが、全体として実践的なコミュニケーション能力がついたとはいい難かった。その原因の1つとして、授業で行ってきた言語活動に問題があるのではないかと考えた。本実施へ向けて、研究の核となるべき授業方法を改善する必要がでてきた。

文献研究により、試行実施において欠けていた点を「タスク中心授業法」の理論 (pp. 1-2) を踏まえた言語活動によって補うことができると考え、研究を立て直すこととした。

## 6 本実施における研究実践

### 6.1 **実践1** 定型の質問文を使ってインタビューすることにより情報収集をするタスク

[活動の意図]

昨年の試行において、生徒が質問をする活動を取り入れたが、生徒は疑問詞を使った文、特に疑問詞のあとに続く語句に言語形式上の誤りが多く、また **do**, **does** の使い分けも定着していないことが分かった。質問文に関するインプットの不十分さも反省する点である。発話の正確さよりも意味に重点が置かれるタスク中心授業法の理論からすれば、相手に理解される質問ができれば問題としないところである。しかし一方でタスク中心授業法の問題点として、タスクの多くが語彙項目を並べることによって方略的に解決できてしまうことが挙げられている。このような問題点を踏まえ、意味伝達中心のタスクを行う前に、タスクの遂行に必要な言語表現や文法項目についてのインプットが重要であると考えた。そこで、ここでの目的を、定型の質問文のパターンのインプットとし、生徒同士のインタラクションを伴うタスクを繰り返し行うことで、より正確な質問文を使えるようになることとしたい。当然のことながら、質問文の正確さを高めることは、求める情報の正確さにもつながるのである。

(タスクの手順)

- ① 生徒はペアになり、事前に練習した表現を使って相手に質問し情報を得る。
- ② 相手から得た情報は、ワークシートに簡単にメモをとる。
- ③ 質問者と回答者を交代し、同様の活動をする。
- ④ インタビュー結果のプレゼンテーションをする。

※生徒が質問する機会を増やすために、次の例に挙げたように、生徒同士で質問し合いながらパートナーから得た情報を、他の人に伝える。ここで生徒は、**Do you**～を、**Does she**～に、また **What is your**～ を **What is her**～に変化させるなどの課題が課せられることになる。

(生徒のワークシート)

インタビューをしよう！

**1** Favorite ( 好みを聞く )

ペアの相手にインタビューしてみよう。まずは、相手の回答を想像して、Yes / No で答えられる質問をします。回答が Yes / No のどちらの場合も、( ) を変えながら3回質問をしてみましょう。次に2つ目の質問 (2) をしましょう。インタビューの結果は、インタビューシートに記入しましょう。

①果物      ②スポーツ      ③TV番組

〈インタビュー例〉

①Do you like ( apples )? ----- Yes, I do. / No, I don't.

②What is your favorite (fruit)? ----- I like oranges.

Interview Sheet    No1

**Favorite**

Name of your partner (      *Risa*      )

fruit	<input type="radio"/> <i>peaches</i> <input checked="" type="radio"/> <i>bananas, melons</i> <input checked="" type="radio"/> <i>grapes</i>
sports	<input type="radio"/> <i>tennis</i> <input checked="" type="radio"/> <i>basketball, volleyball</i> <input checked="" type="radio"/> <i>badminton</i>
TV program	<input type="radio"/> <i>music show, drama</i> <input checked="" type="radio"/> <i>news</i> <input checked="" type="radio"/> <i>comedy</i>

(プレゼンテーションの例)

T : S 1 , who is your partner?  
 S1 : My partner is S 2 .  
 T : OK, S 3 , ask S 1 about S 2 .  
 S 3 : Does she like bananas?  
 S 1 : No, she doesn't.  
 S 3 : Does she like peaches?  
 S 1 : Yes, she does.  
 S 3 : Does she like melons?  
 S 1 : No, she doesn't.  
 S 3 : What is her favorite fruit?  
 S 1 : She likes grapes.  
 T : Good. Next, S 4 , ask S 2 about S1.

(インタビューで生徒が使った定型の質問文)

好みを聞く	
Do you like ( apples )? What is your favorite (fruit)?	Did you talk to ( your uncle )last week? Who else did you talk to last week?
過去の出来事を聞く	Did you watch ( comedy show ) last night? What else did you watch last night?
Did you (study English) last night? What else did you do last night?	未来のことを聞く
Did you eat (onigiri ) this morning? What else did you eat this morning?	Are you going to (play tennis) afterschool? What else are you going to do afterschool?
Did you go to ( Loc City ) last weekend? Where else did you go last weekend?	Are you going to (go shopping) this weekend? What else are you going to do this weekend ?
Did you go to bed at ( 9:30 )? What time did you go to bed last night?	数をたずねる
	Do you have any (music CDs )? How many ( music CDs) do you have?
	時間を聞く
	What time do you usually (get up)?

6.2 **実践2** 情報を得るために、グループで質問文をつくり、ALT から回答を得るタスク

[活動の意図]

定型の質問文や質問内容を設定せずに、自ら知りたいと思うことを自らの言葉で聞くタスクである。グループで相談しながら質問文を考え、発言する前に書くことで、言語形式上の問題を生徒自身で見つけやすくし、また発話の際の抵抗感を軽減する効果を期待する。また、自分

たちの聞きたいことが ALT に誤って理解されるような場合にも、自分たちで修正しながら解決することによって、意味交渉が活発に行われることになる。Swain (1995) のアウトプット仮説 (output hypothesis) によると、思うように意思伝達ができなかった場合でも、その不十分さに「気づく」ことが重要とされ、また、相手からフィードバックを受けることは、自分たちの言語表現が正しいか間違っているかを判断する上で重要な情報となるという (=仮説検証: hypothesis testing)。そして努力の結果、相手に伝わったという達成感はコミュニケーションに対する意欲の向上につながるであろう。また、このようなタスクにおいては、トピックの選択も重要である。トピックに対してどれだけ関心を持てるかが、タスク遂行への意欲を左右する大きな要因となるからである。

(タスクの手順)

- ① 生徒は4～5人のグループになる。
- ② ある事柄 (例: オーストラリアの高校生) について知りたい事を5つ挙げる。
- ③ その回答を得るためにはどんな質問をしたらよいかを考え、ワークシートに書く。
- ④ ALT は順番にグループを回り、質問に回答する。質問の意味が通じないような場合は、生徒はもう一度、質問文を考えなおす。
- ⑤ グループごとに黒板に質問と回答を書き出す。
- ⑥ ALT はそれぞれの質問と回答にフィードバックを与える。生徒は他のグループの質問やその回答を確認する。

生徒による質問の例 (トピック「オーストラリアの高校生」)

be 動詞／一般動詞／助動詞を使った質問	疑問詞を使った質問
Are their teachers strict about hair color?	How many English classes do they have?
Do they like convenience stores?	What are their popular food (lunch)/sports?
Do they put on school uniforms?	How many classes are there in a day?
Do they study Japanese?	Where do they go on a date?
Do they enjoy their school life?	Who is the most popular Japanese for them?
Can they smoking?	When are they get driver's license?
Can they part-time job?	Where do they go school trip?
	Where are their hangout spot after school?

※回答は得られたが言語形式上に誤りのある質問も含む

6.3 **実践3** 1つのトピックについて詳しい情報を得るために、相手の回答に基づき、さらに質問を続けるタスク

[活動の意図]

1つのトピックに関して、相手の応答を基に、さらに質問を続けることでより詳細な情報を得ることができるようになることを期待するタスクである。またそれにより、これまでのように一問一答ではなく、継続したインタラクションによって目的を達成するタスクである。質問をすることによって、一連の会話を継続させていくイメージを作ることがねらいである。次に、実践3で行った3つのタスクを挙げる。

ア. パートナーの紹介文を作るためにインタビューで情報を収集するタスク

[活動のポイント]

紹介文の仕上がりを決定づけるポイントは、インタビューで量と質において十分な情報を得られるかどうかである。つまり、たくさんの質問をして情報量が多い場合でも、それぞれの情報が個別に関連がないような情報だけでは、内容に膨らみがなく箇条書きのようになり文章としてまとまりに欠けてしまう。質問する側が、パートナーの回答を聞いて、さらに突っ込んだ質問をし、1つの事柄に対する詳細な情報が得られるように工夫する必要がある。

(タスクの手順)

- ①パートナーの「**interest** (興味のあること・趣味)」について、インタビューをして情報を収集する (インタビューの時間は1人10分)
- ②インタビューの結果をもとにパートナーの「**interest** (興味のあること・趣味)」を紹介する文章を書く。2分程度で発表することを考え、6～7文の英文でまとめる。
- ③発表をする。

イ. 質問することによって正解を見つけ出すタスク

[活動のポイント]

全部で5つの質問をして正解に辿り着く問題解決型のタスクである。ここでは1つ質問し、その回答を聞き、それをヒントにして次の質問を考える。質問の数が限られているので生徒は互いに協力しながら慎重に質問を選び、どのような質問が有効であるかをよく考え工夫する必要がある。例えば Yes/No クエスチョンよりも疑問詞を使った質問をするほうがより具体的な回答が得られるのである。

(タスクの手順)

- ①ある事柄を (例: **ALT** の好きな動物) 質問することによって探り当てる。
- ②質問は全部で5つできるが、質問1→回答、質問2→回答、質問3→回答・・・という具合に、1つの質問に対する回答をヒントに、次の質問を考えることとする。

ウ. 1つのトピックについてインタビューをしながら会話をつなげるタスク

[活動のポイント]

実際の会話では、その内容を目で見て確認することができないが、このタスクでは、会話の進行をメモすることで、その流れを意識しながら進めることができる。「次に何を言ったらいいのかわからない」「話が盛り上がらない、続かない」といった問題に対する解決のヒントをこのタスクによって与えたい。会話の流れを妨げないようにメモはごく簡単に取るとよい。

(タスクの手順)

- ①生徒はペアになり、ある事柄 (例: 自由時間の過ごし方) に関してインタビューをして情報を収集する (制限時間は10分)
- ②ワークシートを利用し、同じ項目に関し、さらに突っ込んだ質問をしながら **Conversation Chains** (話の流れを意識し関連する話題でインタビューを繋げていくために作成したワークシート上のチェーン) を作っていく。質問とその回答のメモはごく簡単に取っながら進め、制限時間内にできるだけ長い **Chains** ができるように工夫をする。



(方 法)

4人グループを作り、それぞれが下の役割を担当し、ローテーション表に従い役割を変えながら行う。

担当	役 割
Participant (2人)	与えられたトピックで3分間の会話をする。終了後に自己評価表に基づき評価をする。会話においては次のポイントを意識して行う。 〔ポイント〕 ・互いに質問すること ・質問に対する相手の応答をよく聞くこと (そこから次にするべき質問が生まれると考える) ・リアクションを工夫して入れ、不自然な間をつくらないこと
Adviser (1人)	会話の流れをよく聞いて、話が途切れたら、どのようにして情報を聞き出す質問をしたらいいか、次にどんな話題を繋げたらいいかなどのアドバイスを する。
Recorder (1人)	会話を記録用紙に記入し、会話の終了後に評価表に基づき評価する。

(ワークシート)

The First Step : Keep the conversation for 3 min.

4人グループで会話をする。終了後に自己評価表に基づき評価をする。会話においては次のポイントを意識して行う。  
〔ポイント〕  
・互いに質問すること  
・質問に対する相手の応答をよく聞くこと  
(そこから次にするべき質問が生まれると考える)  
・リアクションを工夫して入れ、不自然な間をつくらないこと

トピック: Food, Animal, Hobby, Activity, Season, TV, Hobby

ローテーション表	Participant	Participant	Adviser	Recorder
1回目	A	B	C	D
2回目	U	U	A	B
3回目	B	C	O	A
4回目	D	A	B	C

〔Points〕  
1. 相手の発言をよく聞いて、話の流れをよく聞いて、話が途切れたら、どのようにして情報を聞き出す質問をしたらいいか、次にどんな話題を繋げたらいいかなどのアドバイスを  
2. 相手の発言をよく聞いて、話の流れをよく聞いて、話が途切れたら、どのようにして情報を聞き出す質問をしたらいいか、次にどんな話題を繋げたらいいかなどのアドバイスを  
3. 相手の発言をよく聞いて、話の流れをよく聞いて、話が途切れたら、どのようにして情報を聞き出す質問をしたらいいか、次にどんな話題を繋げたらいいかなどのアドバイスを

(記録用紙)

Recorder (記録用紙)

メンバー				
Name	Participant	Participant	Adviser	Recorder
	Okawara	kobayashi	keeda	Aida

会話記録

O	Hello!	K	What TV program do you like?
K	Do you like watching TV?	O	I like ドラマ
K	Yes.	K	ドラマ?
O	What TV program do you like?	O	Yes, I like 刑事ドラマ.
K	アニメーション!	K	刑事ドラマ...
O	Oh, really?	I	(理由を聞いたら?)
K	What アニメーション?	K	Why do you like it?
K	KEION!	O	Because very interesting!
O	Great!	O	Really?
K	...	K	
I	(何が好きか聞いてみたらか?)		

※Adviser の発言も記録してください

Recorder の評価

1	会話を3分間続けることができた (不自然な間がなかった)	A・B・C
2	質問をすることができた	A・B・C
3	相手の発言を聞いて、さらに詳しく聞くための質問ができた	A・B・C
4	相手の発言にリアクションができた	A・B・C

A:よくできた B:まあまあできた C:あまりできなかった

7 研究評価

7.1 インタビューテストの方法と評価例

[インタビューテストの方法]

生徒はある写真を見て、それについてALTから情報を得る。制限時間は2分間で行う。テストは5月、9月、10月の3回行い、それぞれの生徒について変遷を辿る。検証するのは以下の4項目とする。

- ①情報の量 (インタビューによって得られた情報の総数)
- ②情報の深度 (1つの情報に関して、さらに質問を続けることで得られた詳細な情報の数)
- ③質問文の多様性 (情報を引き出すために使用した質問文の種類の数)

- ④不自然な沈黙（2分間のインタビューの中で、不自然な沈黙がどれくらいあったかを計測する。話が途切れて5秒後に計測をはじめ。ただし考えていることを相手に伝えるための繋ぎの言葉（Well・・・, Uh・・・）などは計測の対象としない。）

[評価例] インタビューテスト1回目（写真はALTの家族）における生徒Aの評価の場合（生徒への指示）1枚の写真を見て、その写真の事柄についてALTに質問をし、できるだけたくさんさんの情報を得てください。制限時間は2分間です。

(評価用紙)

情報 ↓	深さ→					What	○
	wife	28years old	Kumiko	Japanese		When	○
	daughter	1 years old	Saya			Where	○
	Australia	friend's house				Who	○
	summer	December				Why	
	birthday party	enjoy				Which	
						How	○
				Do/Does/Did			
				Are/Is/Were/Was	○		
				単語のみ	○		

(生徒Aの評価結果)

情報の量 (個)	情報の深度	質問文の多様性 (種類)	不自然な沈黙 (秒)
13	8	7	10

## 7.2 インタビューテストの結果

図1

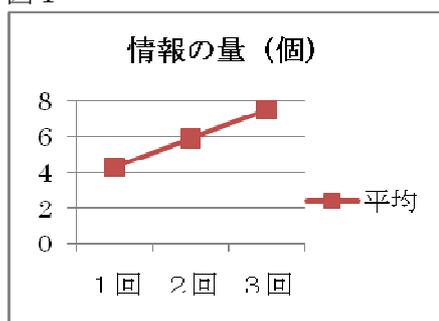


図2

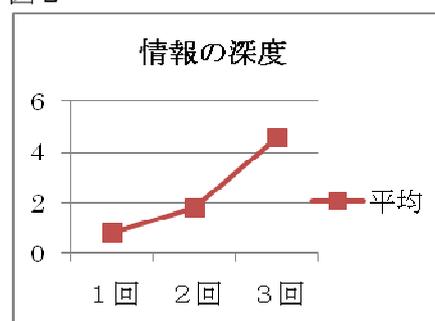


図3

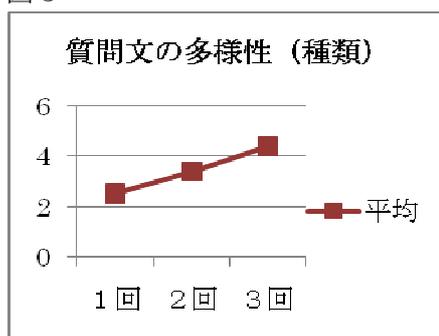
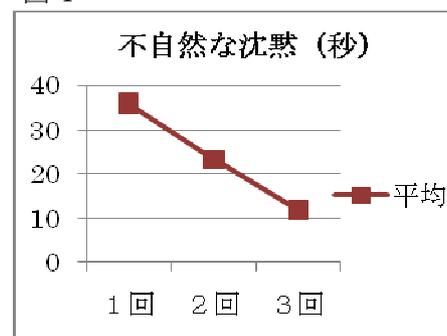


図4



## 7.3 考察

### 7.3.1 インタビューテストの結果

図1では、「情報の量」の平均値が回を追うごとに伸びていることがわかる。1回目が4.3個、2回目が5.9個、3回目が7.5個という結果であった。

図2の「情報の深度」の平均値については、1回目が0.8、2回目が1.8、3回目が4.6で、2回目から3回目の伸びが顕著であった。この伸びはインタビューテストの実施時期に要因があると考えられる。つまり3回目のインタビューテストの時期が、実践3から実践4への移行期であり、生徒は、詳しい情報を得るために相手の回答を聞いてさらに質問を続ける練習やリアクション・コメントの仕方を練習し、互いに質問しながら会話を継続させるタスクを行っていた。そこで身につけたストラテジーが、大きな伸びという結果につながったと言えるであろう。

図3では、「質問文の多様性」の平均値が、回を追うごとに伸びていることがわかる。1回目では2.5種類、2回目では3.4種類、3回目では4.4種類であった。また1回目では、WhatやWhoといった疑問詞が圧倒的に多く使用されていたが、2回目ではWhenやWhere、Howなどが追加され、また3回目では、相手の回答に対してさらに聞き返すような疑問詞Whyを使って質問するなどの傾向が見られた。この結果から、生徒は多様な質問文を使いこなし、それによって様々な情報が得られるようになったと言える。

図4では、回を追うごとに「沈黙する時間」の平均値が減少していることがわかる。1回目では36.0秒、2回目では23.3秒、3回目では11.8秒であった。特にリアクションやコメントの表現を学習した後の3回目のインタビューテストでは、より自然な会話の流れが見られ、インタビューテスト後の生徒の感想にも「会話が成立していた」というようなコメントが多く見られた。これらの結果から、生徒は質問することをストラテジーの1つとして、会話を継続させる力を身につけたと言えるのではないだろうか。

### 7.3.2 タスク中心授業法に基づく授業実践

目標とするコミュニケーション・ストラテジーを習得するために、タスクを工夫して与えることを手段として授業実践を行った。特に実践3で行ったような問題解決型のタスクは、生徒が意欲的に参加する様子が見られたとともに、自然に英語を使いながらその運用力を身につけることができたという点で効果があったと思われる。しかし、タスク達成のために夢中で取り組むと、意味伝達が中心になるあまり、言語形式に意識が向かない傾向が見られるのも事実であった。事前の十分なインプット活動の必要性を感じた。授業実践後の生徒の感想からは「みんなで協力しながら取り組むことで自然に身についた」「ゆっくり焦らず学べたので良かった」というようにタスク中心授業法を支持する声が多かった。

### 7.3.3 生徒の意識

授業実践後にアンケート調査を行った。図5は、会話の継続のために「質問すること」は役に立つかという質問に対しての回答結果である。これはすべての生徒によって支持された。また図6は、生徒が日常的な会話に対して「できる」と感じているかを問う回答結果であるが、最も多かった回答は「まあそう思う」の30.3%であった。「思う」「まあそう思う」を合わせると39.4%、「思わない」「あまり思わない」を合わせると36.4%で、肯定的な回答が上回ったが、その差は僅かである。この結果から、生徒が自信を持って「できる」と言えるようになるには、もっと長い時間をかけて取り組む必要性があるのではないかと思われる。しかしながら、この結果は本校

の生徒の現状を踏まえると、十分に前向きな回答および成果であると感じている。

また、自由記述欄には、「英語は苦手だけど聞いたことが理解でき、言ったことを理解してもらえることが何よりも嬉しかった」「少しでも英語を話せる自分がカッコよかった」「英語の授業を初めて楽しいと思えた」「話すことは苦手だと思っていたけれど、今は英語で会話することを少し楽しいと思えるようになった」「成長したと思う。でももっとたくさん話せるようになりたい」「英語が苦手な自分でも会話はできると知ることができた」といった感想を生徒は書いている。

図5 Q あなたは会話を継続させるために「質問すること」は役に立つと思いますか？

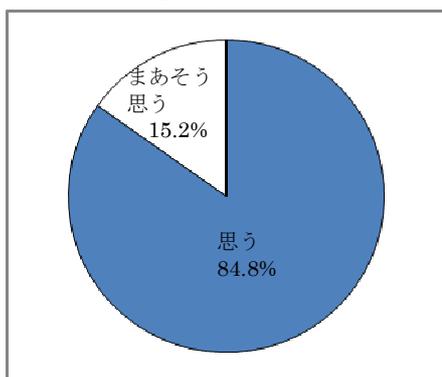
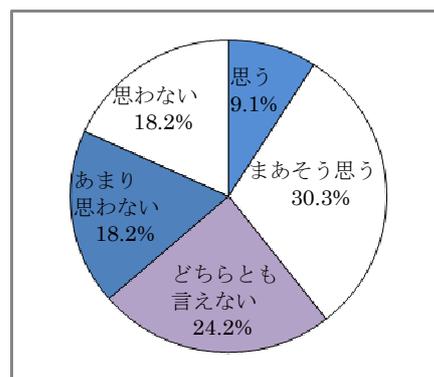


図6 Q あなたは2分くらいの日常的な会話のやりとりを英語で出来ると思いますか？



## 8 結論

以上の考察から、本研究の仮説は支持されたと考える。しかしコミュニケーション能力を向上させるためには、継続的な取り組みが必要である。本研究はその導入にすぎないと思う。しかし、話すことを苦手としている生徒たちが、様々なタスクに向き合い挑戦する姿を見ることができ、また、その変化を身近に感じることができたことは本研究における大きな成果であった。今後さらに研究を重ね、より効果的なタスクの開発・工夫に励み、生徒のコミュニケーション能力の向上に努めたい。

## 参考文献

斎藤 栄二 「自己表現力をつける英語の授業」(2008) 三省堂

小菅敦子, 小菅和也 「スピーキングの指導」(1995) 研究社

多田 孝志 「対話力を育てる」(2006) 教育出版

Canale, M. *Language and Communication* (1983) London : Longman

村野井 仁 「第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法」(2006) 大修館書店

Long, M. *Applied Linguistics* (1983) Oxford : Oxford University press

Swain, M. *Principle and practice in Applied Linguistics* (1995) Oxford: Oxford University Press

Luoma, S. *Assessing Speaking* (2004) Cambridge : Cambridge University Press